地域格差ゼロを目指して

八本松中学校　一年　瀬尾　水樹

東広島市は、豊かな自然が広がる地に大学などの学術研究機能が集まり、様々な人が訪れ住む町です。より住みやすく魅力的な街にするために、私は今の東広島市の現状と課題を調べました。

現在、市全体の人口は継続的に増えており三十年間で約五十％増加しています。その背景には、道路や鉄道などの交通インフラが整ったことや、アメリカ半導体大手「マイクロンメモリジャパン」の移転など、要因は様々ですが、広島大学の移転が大きいようです。そして、それを機に、研究と産業の基盤が生まれました。瀬戸内海に面する安芸津町も合併し自然環境がより多様になりました。

西条町の人口は、倍以上に増えているのに対し、志和町や黒瀬町、河内町、安芸津町は減少傾向にあります。

東広島市は、人口増加が続く「成長都市」

ですが、中心部と周辺部の地域格差は東広島市の今後の課題だと言えると思います。

広島大学が移転してから、約一万五千人の学生の大半は市内で暮らし、学び、アルバイトなどをしています。若い学生の力が町を活性化したのは確かです。豊かな自然のそばで暮らしながら働く若者は少なくありません。こうした若い人材を周辺部に引き寄せることが出来れば、中心部の人口との格差は縮められるのではないでしょうか。若い人材を周辺部に引き付けるために、必要となってくるのは魅力のある就業の場だと思います。

この課題を解決するためには、六次産業化の促進だと思います。六次産業とは、農林漁業者が単に、農林水産物を生産するだけでなく、加工や販売、あるいは観光などのサービスとともに農村における資源を活用しながら一体的に提供することだそうです。

事例としては、精米機メーカー「サタケ」が、中山間部の豊栄町で進める「賀茂プロジ

エクト」です。地域の農家と企業を設立してコメを作り、加工して様々な商品を打ち出しながら、町づくりにも関わっています。利益が生み出される企業活動が見込めると、若い人は集まると思います。

周辺部は就業の場を作りたくても、中核産業の農業を取り巻く環境は厳しいものがあります。まず、魅力ある農業を確立する取り組みが必要です。案として、ICTやロボット技術を活用した「スマート農業」の取入れです。「スマート農業」の導入により、作業の効率化や農家の収益性向上を目指すことが出来ます。そして、新規就業者の確保が可能となります。

「スマート農業」以外にも農業を魅力ある就業先にするためにできることを考えてみました。

人口減が続く安芸津町を例にします。安芸津町は東広島市の中で唯一海に面していて、農業とともに水産業も盛んであり、牡蠣の名

産地としてよく知られています。地域の人々が、特産品の価値や魅力を伝える行動をすることで、地域ならではの魅力となり、外部の人々を惹きつけることが出来ます。こうした特産品を活かした取り組みは観光客にも人気で、若い人材の増加も期待でき、町の活性化にも繋がると思います。

私は、中心部と周辺部の地域格差が東広島市の大きな課題だと指摘し解決策と思われることを提案しましたが、東広島市誕生から五十年間の成長は、素晴らしいもので　であったことも事実です。中学生の私たちが今、できることは、地域の良さと魅力をもっと知ってもらうことだと考えます。積極的にボランティアに参加して、私たち自身ももっと東広島市の素晴らしいことを知り、他市の方にはもちろん、他県や海外にも東広島市に興味をもってもらい、「住みたい」「働きたい」「学びたい」と思ってもらえるような町づくりに私は関わっていきたいと思います。